江戸人物讀本

井原西鶴

市古夏生
藤江峰夫 編

ぺりかん社

江戸人物讀本

井原西鶴

市古夏生
藤江峰夫 編

べりかん社

編者紹介

市古夏生（いちこ なつお）

昭和22年(1947)生まれ。早稲田大学大学院博士課程修了。白百合女子大学教授。専攻・近世文学。
主著論文――『世間胸算用』ほるぷ出版、「『懐硯』二題―「二王門の綱」のことなど―」(『国文白百合』18)。

藤江峰夫（ふじえ みねお）

昭和24年(1949)生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了。フェリス女学院大学助教授。
主要論文――「西鶴」(『日本古典文学」有精堂)、「『恋草からげし八百屋物語』について―西鶴と松前―」(『江戸時代文学誌』5)。

井原西鶴
(江戸人物読本)

1989年11月15日　初版第1刷発行

©1989

編　者　市古 夏生
藤江 峰夫

発行者　救仁郷 建

発行所　株式会社 ぺりかん社

〒113　東京都文京区本郷2-24-4
振替・東京0-48881　TEL03(814)8515

印刷・三栄印刷／製本・越後堂製本

0091-719467-7612

江戸人物読本◇井原西鶴　目次

〈座談会〉西鶴研究の問題点
谷脇理史・市古夏生・藤江峰夫 5
見聞談叢 31
元禄大平記 36
燕石雑志 42
井原西鶴……幸田露伴 45
西鶴の理想（人に答ふる書）……島村抱月 52
俳諧師西鶴の実像……加藤定彦 80
——その作家的出発——
西鶴〈俳諧と浮世草子〉序説……乾　裕幸 93

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「紫女」の素材と方法……井上敏幸 117
古典と西鶴……信多純一 133
——『好色五人女』巻四をめぐって——
『好色五人女』試論……江本　裕 161
——浄瑠璃とのかかわりを中心として——
『武道伝来記』の時代設定……谷脇理史 177
西鶴主要作品解題 199
井原西鶴略年譜 209
主要参考文献 213
編集後記 223

装幀——藤林省三

〈座談会〉

西鶴研究の問題点

谷脇理史（筑波大学教授）
市古夏生（白百合女子大学教授）
藤江峰夫（フェリス女学院大学助教授）

市古　本日は、谷脇さん、藤江さんのお二人に西鶴のことを伺おうと思いますが、それだけでは甚だ茫漠としていますから、幾つかの問題を設定しますので、それについて話していただけたらと思います。

西鶴は御存知のように寛永十九年に大阪で生まれて、貞門俳諧を修めた後、西山宗因風の俳諧に近づき、寛文十三年の『生玉万句』以後俳壇に名を馳せます。延宝五年に最初の矢数俳諧の『大句数』をやってのけ、貞享元年には二万三千五百句を詠んで、矢数俳諧にはピリオドを打ちます。天和二年に『好色一代男』を出版した後、浮世草子作家として名をなし、元禄五年に『世間胸算用』を著わして、翌六年八月十日に亡くなります。それからは遺稿集という形で五作が出版されるわけです

こうして見ると、『見聞談叢』による伝記的問題から遺稿集をめぐる問題まで、お話いただきたいことはたくさんあるのですが、時間の制約もあり、適切なものかどうかわかりませんが、二、三の問題に絞ってみたいと思います。

モデル小説の問題点

西鶴は貞享二年に『椀久一世の物語』、それから翌年に『好色五人女』という、際物のモデ

ル小説を出版しております。これは大変特徴のあるものですが、こういうものはあまりないように思います。歴史的沿革と言うと大きくなりますが、近世に限ってみて、先例を少し話してみたいと思うのですが。例えば『恨の介』のようなものは、あれはモデル小説と言えるのかどうかあやふやなところがあると思うんですね。野間光辰先生[1]の推定だと、事件と『恨の介』とがどう結び付くのか、必ずしもはっきりしませんし、そういう点について何かお考えがあるでしょうか。

谷脇　今の『恨の介』の場合は、モデルそのものは大変あやふやですけれども、当世のモデルをとりあげていることは確かですよね。『恨の介』で特徴的なのは、慶長九年の末の夏だという時間の設定をはっきりさせていることで、これからの話が昔物語ではないんだということを読者に冒頭のところで訴えようとしていることだと思うんです。実際のモデルがどれであるかは十分に分からなくても、読者の立場からすると、これは、当世の誰かを取り上げているのかもしれないという読み方をすることになるわけですね。

仮名草子の世界でモデル小説ということを仮に考えるとすれば、これはちょっと突拍子もない言い方になりますが、それこそ『大坂物語』（笑い）とかですね、『島原記』とか、それこそがモデル小説なんであって、やや違った現れ方をするようになっているわけですね。

市古　それじゃいわゆる軍記とかルポルタージュ文学[2]と言われるような傾向の作品がモデル小説であるということになってしまうわけですよね。

藤江　しかし、時代が下ると、いわゆるルポルタージュといわれている作品の題材は天変地異に関するものになり、ある特定の集団や個人をモデルにしたようなものはありませんね。

谷脇　ですから、モデルのあり方というのがいろいろ問題になると思うんですけれども、少なくとも明暦三年に出ている軍書の禁令[3]を重視すれば、少なくとも士農工商の身分の上のですね、侍階層の場合、特に侍階層の中で上流に属する人達というのを、少なくともストレートにモデルに取り上げるということはできにくくなります。あるいは、やったら何らかの形でお触れに触れるというようなことで取締られる可能

（1）『鑑賞日本古典文学第26巻　御伽草子・仮名草子』に、慶長十一年に好色無頼故に改易された旗本、松平若狭守近次の密通事件を取り上げたものとの指摘がある。

（2）明暦三年正月の江戸大火を描く『むさしあぶみ』等がある。

（3）明暦三年（一六五七）七月の京都の町触の一節に、「一、和本之軍書之類、若し板行仕る事これ有らば、出所以下書付け、奉行所へ指上げ、下知を請くるべき事」とある（今田洋三『江戸の禁書』）。

性が当然生まれてきますよね。

そういう場合に、執筆する側がどの程度の姿勢で対応したかは問題ですが、僕なんかは自分が気が小さいからですけど、そういう法令が出ていると、やはりちょっと書けないという感じになって自己規制をしてしまうような感じがしますね。

恐らくそれと同じことで、当然なことですが、政治とか社会とかあるいは幕府の政策とか、そういったようなことに関わってくるようなことも書きにくくなりますよね。そうしますと、モデルを簡単に表側で取り上げることのできるものは、それにどこからか故障が入らないようなものならばいいけれど、何らかの文句が出て来そうなものは避けるというような方向になってきますね。

市古　そうしますと、仮名草子の場合、主人公を庶民とすることはほとんどないので、法令との絡みもあって、モデル小説の執筆は、かなり難しいということになりますね。そこで次に西鶴のモデル小説に触れたいと思いますが。

西鶴のモデル小説

谷脇　西鶴の場合ですと、例えば一代男の中では実名は出しませんはねえ。それは役者と遊女を初めとする遊里関係者は公界者ですから実名が出てくるけれども、一般のお客で実名を出す例というのはないですね。二代男の場合も同じです。その点ではある程度、何て言うのか、どこかに自己規制の意識というのはあるかもしれませんね。

だからそれに対して、椀久とか五人女の主人公達とかは実名で出ているということになるわけだけど、それはどうなんだということになりそうですね。

市古　椀久の場合は、それ以前に歌舞伎があるわけですよね。だから当然檜玉にあげられるとすれば、歌舞伎そのものが対象になっている筈だからそれで安全という……。

谷脇　五人女の場合もそれに近いといえば近いですね。ただ貞享元年[1]に、むざとした小唄がいかんとかいうような禁令が出ていますから、そういったモデル歌謡みたいなものもやや問題

(1)　十一月に「町中にてむさとしたる小歌・はやり事、勿論当座の替りたる事板行致し、売り候ものこれ有り候。家主吟味致し、何方にても左様のもの一切板行仕るまじく候（後略）」とのお触が出されている。

になるというような状況にはあったんでしょうね。

市古　歌祭文もそういう感じに入るかもしれませんね。

谷脇　ただ僕が思うに、そういった禁令の場合で、具合の悪いモデルというのは、当時で言ったら、侍階層とか、あるいは大名家お出入りの大町人とか、その程度の人達を取り上げる場合が問題であって、一般の庶民階層なんかを取り上げる場合には、問題にならなかったんじゃないかという……。

市古　ただ、おさん[1]の嫁入り先の大経師というのはかなりの家柄だと言えるんではないでしょうか。

谷脇　言えますね。だから大経師はちょっと例外になっちゃいますね。

藤江　ただモデルといってもモデルがどういう階層に属するのかということ、椀久の場合にしても五人女の場合にしても、例えば歌祭文なり歌舞伎等ですでに取り上げられていると、部分的にせよですね、それを取り上げたというのは、ちょっとモデルといっても違うような気がしないでもないんですが。

だからこの場合、モデル小説といっても西鶴に例えば政治向きのこととかそういうものについて触れる意識は恐らくほとんどないということですから、市井で話題になっている事件で、それもどちらかというと政治向きではなくて、巷間と言いましょうか庶民の、庶民という概念も難しいかもしれませんけれども、そこで時事的な、いわゆる三面記事的な話題を取り上げたという程度の意識じゃないかなという気がするんですがね。

谷脇　それと、これもよく分からないんですけど、例えば五人女なんかの場合で言えば、正式に処罰されて結着がついちゃっているわけですよね。そういう場合は、もういいのかもしれないということもあるかもしれない。ハイクラスの人達、侍階層は駄目だけれども、今、藤江さんが言われた、定義は難しいかもしれないけれど、いわゆる庶民層の場合は、話の結末が着いていれば構わないのかもしれない。あるいは椀久なんかみたいにその家がもう破産してしまって、それを取り上げても文句の出ようがないというような、そういうことであれば問題はないのかもしれませんですね。

（1）『好色五人女』巻三の女主人公。暦屋の大経師意俊の妻で、手代の茂右衛門と密通し、処刑された。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それはいつの時代でも、上流の人達に対する方が関心を持たれるかどうかは分からないけれども、やはり庶民の噂の世界で言えば、例の綱吉のいろんな伝説が流れているように、やはり綱吉将軍様はどうこういうことは恐らく語られているでしょうし、それから堀田正俊[1]みたいな筆頭老中が城中で暗殺されたりすれば、やはり面白い話に違いありませんから、それが巷間の噂でいろいろと流れている。それを戸田茂睡の『御当代記』なんかには記されることになるわけですけれども、少なくとも出版される作品には書かれませんよね。書かれているのかもしれませんけれども、そのことだとはっきり書かれることはないようですね。

だからそういう意味で言って、西鶴がそういう庶民層をモデルに作品を書いたということ、それは一つの新しさで、椀久のように世の中から脱落していく、そういう人物を積極的に主人公に取り上げるといったようなことは、物語の世界では余りないわけです。それゆえにそのことが意味を持ってくるわけですけども、そういったことが生まれる一つの背景みたいなものに、案外そういうものしか書けなかったなんていうこともあるのかもしれませんね。余りそういう方向にばっかり結びつけ過ぎてしまうといけないのかもしれませんですけどね。

藤江　規制があったから書かなかったのか、それとも余りそういう意識がなかったのかというのは、これはどちらが先かという問題になるかもしれませんけれど……。

市古　諸人の迷惑[2]になるという諸人というのは、やはり武家階級以上、あるいは公家とかそういう別世界の人達のことで、町人階級の人達がそれに含まれるというのは余り考えなくてもいいんじゃないかと思いますが。

谷脇　僕もそんな気がしますね。

市古　ただ名字帯刀を許されたとかそういう人達はまた、待扱いにするのかもしれませんけれど。

谷脇　大体、民主主義の時代と違いますから、だからいざとなれば、斬り捨てられる立場ですから、実際にはそんなに簡単には斬り捨てられないとは思うけど。

だから法令で出てくる時に考えられている、その諸人というのは限られた階層ですよね。

市古　少なくとも、いわゆる庶民を対象にして

(1)　大老であった貞享元年(一六八四)八月二十八日に、江戸城中で若年寄稲葉正休に刺殺された。

(2)　貞享元年四月の出版に関するお触の一節に「御公儀の儀は申すに及ばず、諸人迷惑致すべき儀、其の外相障る儀、開板一切無用に仕るべく候」とある。

いるというふうには、ちょっと考えられないですね。

藤江　この場合で言うと、だから出版規制ということはあったと踏まえながらも、それが椀久だとか五人女を書く場合、西鶴をどれだけ規制したかということですね。そして、恐らくそうは規制していないだろうというふうに考えると、椀久の場合だったら大坂の人達は実際に椀久の狂乱のさまを見ていたかもしれない、あるいは椀久一世の中に西鶴が書いていることを信じれば、大和屋甚兵衛[1]が椀久生存中にすでに、歌舞伎で取り上げているわけですから、このようなものを扱う時に、西鶴がどういう扱い方をしているのかというようなところに、西鶴におけるモデル小説の問題というのはなるのかしれませんね。

谷脇　だから問題は、その場合の大和屋甚兵衛がやった椀久物語の歌舞伎の実態が分かると面白いわけですけれど、よく分からないですね。また、お夏清十郎の話でも、舞台に乗せたということが書いてありますよね。それで実際に上演されていたものがあることは確かなんでしょうから、それとの対比によって西鶴の特色が考えられればいいわけだけれども、残念なことに、歌舞伎狂言本そのものがこの時期のものはないわけでしょう。ちょっと時代が遅れるものならあるわけですけれど、その辺がちょっと難しいところです。一つの仮説的な試みとしては、演劇的なものの方が、あるいは演劇の世界の方が、小説の場合よりも、いろんな趣向が引き継がれることも多いと考えられるから、仮に後年のものであっても、そこから類推することが可能かもしれませんね。

　モデル小説というのは、いつの場合でも必らず、モデルはこうで、作者はそのモデルを使ってどういうふうな創造を行ったかという問題になってきてしまうわけですけど、西鶴の場合には、そのモデルそのものが、非常にあやふやで曖昧ではっきりしないといったような場合が多いですよね。そのために、どうしてもモデルを出発点とした作品論みたいなものがしまらなくなってくる可能性がある。それは、永代蔵なんかの場合でも同じですよね。永代蔵の中に出てくる町人達については、かなりの数の指摘があるけれども、永代蔵の中で描かれている場面について、実際にはどうだったのかということに

（1）貞享元年十二月に大和屋甚兵衛が椀久狂言を上演したが、その内容は不明。

なると、ほとんど分からないわけですね。ただ三井や藤市[1]の話なんかは一応分かるけど、他の場合にはほとんど分からないわけで、実際あった話を取り上げているのであろうというようなことを言っても、それ以上分からない、したがって作品を読む上で何の参考にもならないということになっちゃいますね。

藤江　そうすると、実態が分からないから、書かれているもので、西鶴が一体何を描こうとしているのかという読みを、我々はすればいいということになりますね。

谷脇　そういうことになりますねえ。

だから恐らく、このモデルの問題と、典拠の問題というのは全く同じことなんでしょうけど、何をもとにしているかということが、特に当時のモデルとか事件とかっていうことになってくると、頗るはっきりしないんですよね。だから、ちょっと似てるとこれじゃないかということにどうしてもなり勝ちなんですけど、やはり、それでいいのかということになりそうですね。

藤江　今、谷脇さんが言われたように、モデルの問題というのは典拠の問題と重なるところがありますね。私も、どちらかというと、お話にありましたように、谷脇さんに批判をされるような論文[2]を書いているものですから、具合が悪いのですが、五人女の場合で言えば、先程も少し話題になったように、いわゆる演劇的趣向が認められることは事実ですし、信多純一[3]さんの言われているような古典との関係もありますね。ですから、モデルなり典拠なりの詮索は、徒労に終わることが多くてもやるべきだと思うんです。ただ、結局は、モデルなり典拠なりが、どこまで確実かという問題になってしまうのかもしれませんね。それが確実なら問題はないし、見当はずれなら意味がないわけですから。

いずれにしても、この問題は個々の具体的な事例で検討していかないと、水掛け論になってしまいそうですね。

市古　典拠なりモデルの問題にかかわる論文は本書にも、谷脇さんの「『武道伝来記』の時代設定」、信多さんの「古典と西鶴」、井上さんの「『紫女』の素材と方法」などが収めてありますので、参照していただきたいと思います。

(1)　『日本永代蔵』巻一の四に三井高利、巻二の一に藤屋市兵衛をモデルにした話がある。

(2)　藤江峰夫「『恋草からげし八百屋物語』について――西鶴と松前――」。

(3)　信多純一「中世小説と西鶴――『角田川物かたり』と『好色五人女』をめぐって――」、同「古典と西鶴――『好色五人女』巻四をめぐって」。後者は本書所収。

西鶴と版元

市古　モデル小説のところで、だいぶ禁令の話が出ましたので、出版ジャーナリズムとか、あるいはそれに関わる法制のことをもう一度話したいと思うんですけど、まず出版書肆のことについてですけども、一代男で荒砥屋という、その場限りの素人の本屋を仕立て上げて出版したということが大変目を引くわけですね。

その前の、俳諧師の時代から西鶴はいくつかの本屋と関わりを持っていて、必ずしも出版界と無関係ではない人なのになぜ荒砥屋[1]を使ったかということですね。特に談林俳諧師と付き合いのあった深江屋太郎兵衛[2]からも本を出していますし。天和三年以降、西鶴は本格的に浮世草子を書き始めるわけですけども、そこで主として池田屋三郎右衛門と森田庄太郎という二軒の本屋を版元としていくわけですね。

ところが調べますと、池田屋はどうも天和三年頃創業じゃないかと思われますし、森田庄太郎も、現在分かっている範囲では貞享元年が創業に近いんじゃないかという感じがいたします。そうすると専業の本屋だと言っても大変新興の本屋だという感じがするわけです。こういうところから出したということも、またちょっと面白いということがあるんですね。

それから本屋のことで言いますと、貞享三年辺りから三都版というのが、いわゆる大坂だけではなくて京都の本屋とか江戸の本屋とかいうのが関与して出版されるケースが多くなるわけですけども、それは野間先生の説[3]では、例えばそういうものによって江戸の読者層を考えて武家ものなどが出てくるということなんですけど、版元との関係というのがちょっと大事なことだと思いますので、お聞きしたいと思いますが、まず荒砥屋のことはいかがでしょうか。

藤江　荒砥屋はやはり素人出版と思われます。ですからあらかじめ商業出版と言うのでしょうか、そういうものを意図したものではないというふうに現在は考えられています。

ただ、一代男が大変ヒットしたということで江戸で川崎屋[4]から海賊版が出たりして、専門の本屋が西鶴に注目したということは言えると思うんですけども。一代男の場合も版元が後で変わりますね。あれは秋田屋でしたか。

（1）荒砥屋孫兵衛可心。荒砥屋は砥石問屋で西鶴の俳諧仲間と推定されている。

（2）延宝七年に『西鶴五百韻』を刊行している。

（3）野間光辰「西鶴と西鶴以後」（『西鶴新新攷』）。

（4）貞享元年（一六八四）三月に川崎屋七郎兵衛が菱川師宣の挿絵で『好色一代男』を出版している。

ただ、いま市古さんが言われたように一代男以降の版元が、初期は大坂の版元が多い。それがある意味で新興の本屋さんで、西鶴の浮世草子が流行するとともに、大坂の出版資本というのが力をつけてきたというようなことも言われていますけれども、その辺りのところの見方はどうなんでしょうか。

谷脇　市古さんが言われたように、池田屋とか森田とかいうのが貞享期の西鶴の版元の中心になるわけですけども、それらが駆け出しの出版屋さんであることは、現在残されている資料というか出版物で見る以上、間違いのないことのようですから、いま藤江さんが言われたように、一代男が大変評判がいい、それで駆け出しの本屋さんが、新進作家という西鶴にすぐ飛びついてきた、恐らくそんな状況があるんでしょうね。

その場合に一代男の場合で言うと、それまで深江屋太郎兵衛と俳書の出版の上でかなりの関係を持っていたにもかかわらず、なぜ荒砥屋から出したのかという問題が当然出てくるだろうと思いますけれども、まあ分かりませんが、要するに俳書とは性格の違ったもので、俳書に較べると、ぐっと恐らくその段階では低いものと見られていた一代男、あるいは西鶴の意識の上でも、これは自分の本領とは違うということを考えていた一代男だから、まあこれまで付き合いのある本屋さんとは違って秘かに出したとか、そんなことを考えるより仕方がないんじゃないかと思いますね。

特に深江屋の場合に、西鶴の小説本の方で言うと、貞享四年になって『男色大鑑』の出版ということで初めて絡んでくるわけですけども、推測で申しますと、どうも自分のところから出している俳書は余り売れんのに小説の方ばかり売れて、何か損したというような感じで、俺も一口乗せろというように、四年位経って乗り出してきたような感じがあるように思います。西鶴と出版ジャーナリズムということで本屋さんとの関係を考えますというと、従来、大きく言うと二つの捉え方があるように思いますね。一つは野間先生もそうですし、暉峻先生もそうですし、あるいはそれよりも前に出版ジャーナリズムの関係を強調されたのは、この間お亡くなりになった金井寅之助[1]さんだと思いますけども、そういった方々が出版ジャーナリズムとの関係を仰有る場合、大体の場合、出版ジャーナ

（1）野間光辰「西鶴と西鶴以後」（前掲書）、暉峻康隆「西鶴と出版ジャーナリズム」（『西鶴新論』）、金井寅之助「西鶴小説のヂャーナリズム性」（『西鶴考』）。

リズムあるいは本屋さんの要請によって西鶴がどの程度動かされたかというような捉え方をしてきているわけですね。

僕も前に、「出版ジャーナリズムと西鶴」[1]という題名の論文を書いたことがありますが、僕の場合は、ちょうどそれと逆の捉え方をしまして、むしろ西鶴というのは、駆け出しの出版屋さん達を自由自在に操ってリードしていくような、言ってみれば、駆け出しの大坂出版界の希望の星だというようないい加減なことを書いたと思いますが、いろんなアイデアを出して続々と自分好みの本を出していくと、いったような形で一生を送ることができた、幸せな作家だったのではないかということを書いたことがあります。

ということのもう一つの理由は、貞享期は先程の森田、池田屋が中心なわけですけども、元禄元年の二月以降には、もっぱらそれまで関係のなかった新しい版元が加わってくるわけですね。江戸の万屋清兵衛はずうっと続いているわけですが、これは江戸での売捌元ということで別格とすれば、新しい版元が西鶴の本の出版元ということになる。ということは、前の池田屋、森田といったような馴染みのある出版屋となぜ縁を切ったかということに自らなってくるわけですが、流行作家である西鶴のところに新しい本屋さんが注文をしにくる。そうなると当然、それに対する謝礼がどの程度であったか分かりませんけれども、それまでよりは条件が良かったかもしれない。

それから、そういう形で前の縁のある出版屋さんを切って新しい本屋さんが参入してくるわけですから、西鶴の言うことも自ら聞くだろうというような、そんなことも考えられることで、いずれにしても出版ジャーナリズムに動かされたんではなくて、むしろ西鶴の方が動かしていたんだという捉え方をしています。そんなことで、西鶴は出版屋さんに当然書いてくれと言われていると思いますが、内容への注文とか、形の上でこういう形でという注文とか、そういうのはむしろなくて、例えば二十不孝の目録にカットが入ってたり、永代蔵の目録に暖簾が書かれていたりとか、そういったようなアイデアも含めて西鶴の側から出ているんじゃないかというふうに考えるんですけど。

藤江　結局、貞享三年以降新規な本屋さんが参

(1) 谷脇理史『西鶴研究論攷』所収。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com